

アリストテレスにおける経験と第一原理

酒井 健太朗(九州大学)

アリストテレスはしばしば「経験主義者」と言われる。この根拠は、『分析論後書』(以下『後書』)第2巻第19章にある。そこでアリストテレスは論証的知識(*epistēmē*)の第一原理が「経験(*empeiria*)」から生じると論じる。

しかし、この経験概念の内実と、その論証的知識への関係は明確ではない。というのも、アリストテレスは『後書』第2巻第19章で経験の重要性を強調する一方で、『形而上学』A巻第1章等では経験と論証的知識の関係についてより慎重な態度をとっているからである。

ところで、従来、『後書』第2巻第19章の第一原理が概念か命題かについて、解釈上の問題となっていた。現代では、この問題は、Kahn (1981) や Modrak (1987) の示唆により、問う必要のない偽なる問題であることが研究者の間での共通理解となりつつあるものの、Kahn は論文の中でさらなる問いを提起している。それは、『後書』第2巻第19章の第一原理が、卑俗な概念(*vulgar concept*)か学術的概念(*scientific concept*)か、という問いである。『後書』第2巻第19章は、帰納(*epagōgē*)によって「人間」のような一般的(卑俗な)普遍が獲得されることを論じているように見える。しかし、このような一般的普遍は、論証がそこから始まる第一原理としてふさわしくないのではないだろうか。他方、論証の第一原理は『後書』の他の箇所において定義(*horismos*)であるとしばしば述べられる。帰納によって獲得された卑俗な概念は定義たりうるのだろうか。ここには、論証的知識の第一原理に関する、卑俗な概念と学術的概念の間のギャップが存在する。

Kahn は卑俗な概念と学術的概念のギャップを、アリストテレスによる名目的定義(*nominal definition*)と実在的定義(*real definition*)の区別のうちに認めることを提案する。ここでの名目的定義は対象 X の「何であるか」の一部を把握することで月蝕や雷鳴のような自然事象の予備的ないし前学的認識となるような定義である。他方、実在的定義は、X の原因ないし根拠を提示することにより、X の「何であるか」を十全に認識するところの完全な定義である。Kahn によれば、『後書』第2巻第19章の帰納は単に X の名目的定義を説明するに過ぎない。彼は名目的定義と実在的定義の間のギャップを埋めるためには『後書』第2巻や他のアリストテレスのテキストにおける定義論が必要であると考えている。しかし、Kahn 自身はこの問題の考察を先に進めていない。

Kahn によって『後書』第2巻第19章の新たなギャップが提示されて以来、研究者たちは(それと明示することがなかったとしても)卑俗な概念と学術的概念のギャップを埋めることにつとめてきた。それら先行研究の中では、上記のギャップを埋める手段として、経験概念と定義概念の考察に焦点が当てられている。

代表的な先行研究として以下の3つの立場を挙げよう。

第一の立場は Scott (1995) によるものである。彼は、『後書』第2巻第19章の帰納が日常的な学びや概念把握と対立するところの、より高次の学術的学びを遂行すると解する。この帰納は、卑俗な概念を定義(すなわち学術的概念)へと発展させる過程である。それゆえ、Scott の解釈によれば、卑俗な概念と学術的概念のギャップは帰納過程そのものを詳述することで埋められることになる。

第二の立場は、Butler (2003) の提示する「経験のドクサ理論

(*Doxastic Theory of Empeiria*)」(DTE)によるものである。これは、人の経験が或る一定の特徴を持った信念(*belief*)から構成されるとする理論である。彼の解釈のポイントは、経験とは正しい信念も誤った信念も含む概念であり、そのような経験概念が論証的知識を探求するための基盤となるということである。Butler の解釈では、卑俗な概念と学術的概念のギャップは、帰納によって獲得された信念(これは卑俗な概念をそのうちに含む信念である)の根拠を学術的に探求することで埋められることとなる。

第三の立場は、Modrak (2010) によるものである。彼女は、アリストテレスのテキストにおける名目的定義の概念が、(a)虚構的対象の定義、(b)「X」を連言によって示す定義、そして(c)「X」を選言によって示す定義という3種類の用法を持つことを明らかにする((b)と(c)は「X」の外延を示すことになる)。Modrak は名目的定義の(b)の用法をアリストテレスの経験概念と重ね合わせることで、Butler と異なり、経験的判断とは感覚によって与えられる個々の判断の連言と解する。個々の判断をまとめあげると、その根拠を提示することのできない経験の段階は学術的概念を把握している段階ではないだろう。Modrak の解釈に従えば、経験の含む個々の判断を統一する根拠を提示することで、卑俗な概念と学術的概念のギャップは埋められることになる。

以上の3つの立場は、いずれも『後書』第2巻第19章の経験や帰納の議論に焦点を当てている。しかし、このテキストには知性(*nous*)概念というもう1つの主題が存在する。Kosman (1973) は、『後書』第2巻第19章の知性概念の考察から、帰納によって獲得された概念が、それを原理として認識することなしには論証的知識の原理たりえないことを明らかにした。本発表は Kosman のこの示唆に賛同し、そこからもう一步を踏み出すものである。

本発表の目的は、先の3つの立場の検討を通じて、それらとは異なる仕方でも、アリストテレスの知識論における卑俗な概念と学術的概念のギャップを埋めることである。

本発表は、帰納によって獲得された概念を使用する人の身分に着目する。つまり、帰納によって獲得された概念を専門家(*expert*)が使用する時、その概念は学術的概念として論証的知識の原理にふさわしいものとなる。他方、帰納によって獲得された概念を専門家以外の素人(*layman*)が使用する時、その概念は単に卑俗な概念であるにすぎない。

また、アリストテレスは『後書』第2巻第19章で知性が最も精確な認識であると述べる。この知性が、概念が論証的知識の原理として専門家によって認識された状態のことを意味するのであれば、卑俗な概念は、論証的知識の原理として認識されることで学術的概念となる。専門家によって論証的知識の原理として認識された概念こそ定義たるにふさわしい。以上のように解することで、卑俗な概念と学術的概念のギャップは埋められることになる。